

フォーラムに参加したことがある住民は73%である。参加しなかった理由としては「時間が合わない」が最も多く、「興味がない」という回答はない。フォーラムへの関心は、「非常にある」「少しある」をあわせて64%であり、半数以上の住民が関心をよせている。フォーラムへの不満も「ない」「あまりない」あわせて60%以上で、一定の関心を集めている（図 16,17）。

ワークショップに参加したことがある住民は69%である。参加しなかった理由としては、フォーラムと同様で、参加したことがない回答者のワークショップへの関心は、「あまりない」と「ない」が80%を占めており不満もみられる（図 18,19）。

理由としては、何が話し合われたのか分からないことが挙げられ、これは参加しない理由「情報が無い」とも関連している。

参加者については、主体的に参加していると「つよく思う」「思う」が約80%、内容を理解できていると「つよく思う」「思う」が86%と、積極的な主体性が関みられる。満足度についても80%以上が、「どちらかといえば満足」以上の評価をしている。

集団移転に関わる期待・不安などの自由記述においては、再び小泉地区で暮らすことへの期待や喜びについての回答が多くみられる。不安な点としては、「一日も早く家を建てたい」「再建までの時間がかかりすぎるのではないかなど、再建までの時間を懸念する記述がある（表4）。

## 6-2. 分析

小泉地区では、2011年4月に結成された

住民組織である「小泉地区明日を考える会」が事務局となり、「小泉地区集団移転協議会」を立ち上げ、集団移転へ向けての合意形成を進めてきた。調査結果に基づき、ワークショップに関する住民評価についての課題を分析する。

### (1) ワークショップ手法の成果と課題

フォーラムおよびワークショップには共通した傾向がある。アンケート回答者全体の約7割が一度はフォーラム・ワークショップに参加したことがある。一方、参加したことがないとの回答のうち約7割は、フォーラム・ワークショップの内容を一部知っているとしている。「興味がない」との回答がないことから、フォーラム・ワークショップは参加の有無に関わらず、ほぼ全住民が何らかの関心を寄せているといえる。

複雑な集団移転事業の仕組みも含め、住民全体で知識を共有するための解説の工夫と、それによる住民の集団移転に関する理解度の高さが、毎回の満足感につながっていると考えられる。ワークショップで議論が理解できていると思うかという質問に対して、「強く思う」「思う」と答えた人が全体の97%、「思わない」「全く思わない」との回答がないという結果もそれを裏付けている。住民同士の意見交換や、模型や地図を見ながら具体的に未来の小泉をイメージしていく機会が得られたことが、高い満足へと繋がっているといえる。

また、ワークショップに主体的に参加しているかという質問に対して、「強く思う」「思う」との回答が全体の86%であり、ワ

ワークショップの議論でよく発言しているかという質問に対しても「強く思う」「思う」との回答が全体の47%であることから、主体的にワークショップに参加している実態が理解できる。ワークショップを通じて、住民が自らの小泉地区を客観的に捉えなおすきっかけになっていると考えられる。

ワークショップ手法は、住民の主体性・積極性を涵養したといえるが、その一方で、フォーラム・ワークショップに参加しない・できない理由として、「時間が合わない」「遠い」「交通手段がない」との回答が多くあり、「体調不良」「同居人の世話」「情報がない」などの意見も出ている。

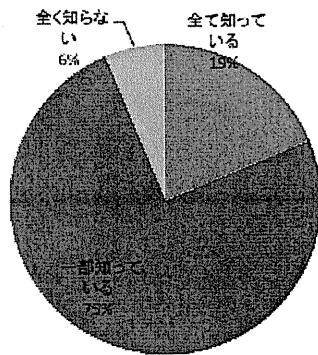


図20 [不参加者] ワークショップ内容の理解

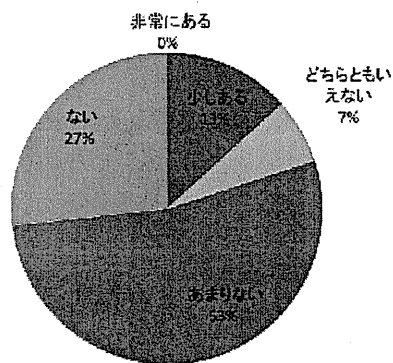


図21 [不参加者] ワークショップへの関心

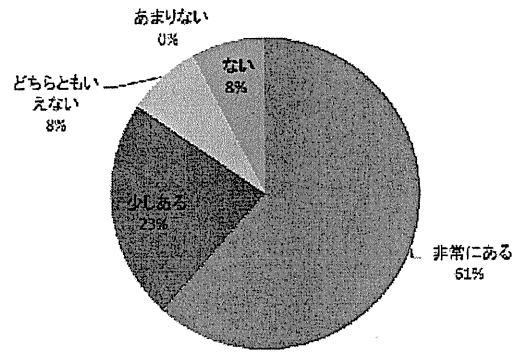


図22 [不参加者] ワークショップへの不満

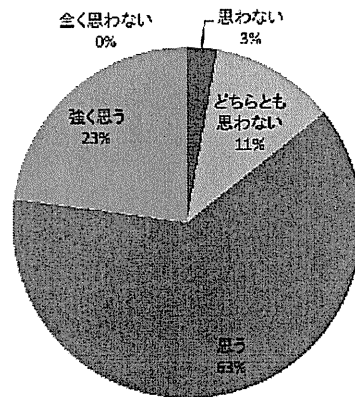


図23 [参加者] ワークショップへの主体的に参加しているか

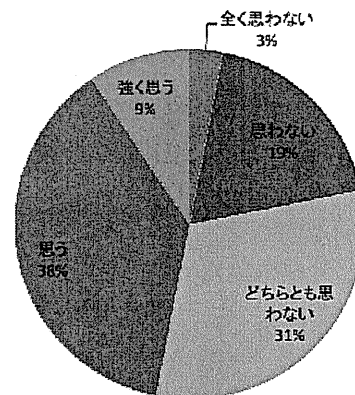


図24 [参加者] ワークショップでの議論でよく発言しているか

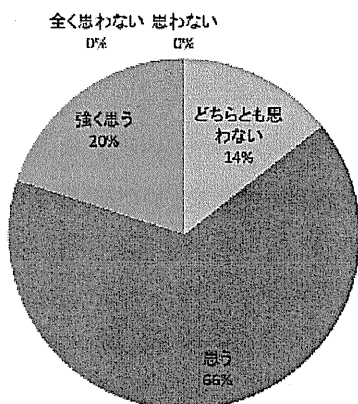


図 25 「参加者」ワークショップでの議論  
がよく理解できているか

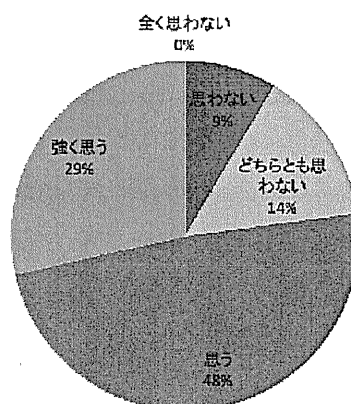


図 26 「参加者」ワークショップで新たな  
発見があるか

表 5 各回ワークショップのテーマ

第 1 回	「継承すべき小泉のいいところ」
第 2 回	「小泉地区がずっと元気では①」
第 3 回	「小泉地区がずっと元気では②」
第 4 回	「人～まち～自然①」
第 5 回	「人～まち～自然②」
第 6 回	「人～まち～自然③」
第 7 回	「人～まち～自然④」
第 8 回	「小泉の景観について考える」
第 9 回	「地域の絆とはなんだろう①」
第 10 回	「地域の絆とはなんだろう②」
第 11 回	「魅力あるまちづくり」
第 12 回	「土地の再生」
第 13 回	「後世に伝える①」
第 14 回	「新しいまちづくり実践編」
第 15 回	「新しいまちづくり実践編②+後世に伝える②」
第 16 回	「新しいまちづくり実践編③」
第 17 回	「我が家のぬくもり①」

	不 満	や や 不 満	ど ち ら も な い	や や 満 足	満 足
第1回	0	0	3	13	9
第2回	0	0	3	10	8
第3回	0	0	2	14	9
第4回	0	0	1	9	13
第5回	0	0	3	9	10
第6回	0	0	2	10	11
第7回	0	0	3	7	11
第8回	0	0	2	12	15
第9回	0	1	3	6	6
第10回	0	0	5	9	7
第11回	0	0	3	10	7
第12回	0	0	4	10	6
第13回	0	0	3	8	9
第14回	0	0	2	11	10
第15回	0	0	3	6	12
第16回	0	0	2	12	12
第17回	0	0	4	5	13

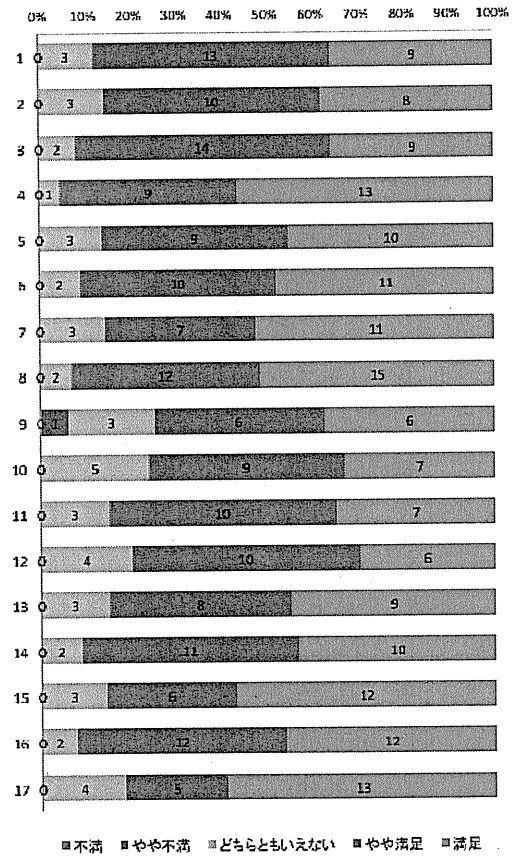


図 27 各回ワークショップの満足度

表6 ワークショップ全体を通してどのような所が満足できたか（自由記述）

---

### 移転事業

街づくり、地域、自宅の様子が具体的に想像することができ、共同使用箇所についても多くの人の合意の元に考える事ができた。移転する方々の望んでいる住宅環境が具体化し、今後何十年も住み続ける誰にとっても住み良い街の姿が見えて来た

また小泉に住めると思った

被災前に住んでいた小泉町地区景観と同じ様なまちづくりに満足しました

ワークショップを通し、改めて、自分の小泉地区への重い等を考える事が出来た。

防災集団移転のワークショップに参加し、集団移転の流れが良く理解できた

### WSの内容

- 改めて小泉の良さがわかった
- 沢山参考になった
- 森先生のお話は、わかりやすかった。
- 建物の色、並び、建物の位置、ラドバーン方式道路(直線か、カーブをつけるか)など
- 教授の話したい事がよくわかり勉強になった
- これからのまちづくりをどう考えるかを皆で考えた点、良かったと思う
- 地域みなさんと意見を出し合えた
- 目で地形や模型をみれて未来図が見えた事と地域の人々とあえて話ができたと
- 色々な体験が出来る事が良かったです。

### 外部協力への感謝

森教授をはじめ、参加者の色々な意見や考えを聞く事ができて

とても満足しております。

何かを成し遂げるには「想いを定める事」が何より大事。家を「一刻も早く」と焦る私たちを見事にセーブして眼には捉えられない町づくりのキーポイント（コミュニティの大切さ）をしっかりと私たちに認識させてくださった講座の組み立てに感謝します

最初は地形もわからず全く漠然としてどう考えたらよいかわからなかったが、会が進むにつれて型が見えて来るとても希望がみえてきた。

遠くからいらっしゃる先生方にとっても感謝の念でいっぱいでした。

---

表7 ワークショップ全体を通してどのようなところが不満だったか

### 参加

同じ方々の参加で今まで参加していない方はどう思っているのか気になります。

参加者を見ると、50代以上の方がほとんどです。1人暮らしの高齢者ならいざしらず、もっと若者の参加が望ましいと思います。将来、住むのは若者なのですから……。参加者を見る度不満です。

多くの方々が参加したワークショップだったが、どの家からも同じ人が出席していたように思う。もっと家族の中でも多くの人に参加してもらいたかった。

子どもたちの考える街についてもあの中で聞いてみたかった。

### 話し合いの内容

家並みを揃えるとか少し難しいのではないかと思います。1日でも早く新しい家が欲しいと思っているのに土地の造成等にも時間がかかりすぎるのではと心配です。

不満とはいえませんが、たくさんの興味があるのですが、自分は難聴にて思うように聞き取ることができず、また、家族をみなくてはならず、息子に一任にいるので、後半には参加できなかった事残念に思っています。

趣向を凝らし、ワークショップを準備してくださるのに大使、与えられたテーマに対し、深く考えることがあまりできず（自分たち自身のことなのに）毎回不完全燃焼な気分を抱えて帰りました。そんな自分に不満を覚えます。

専門用語が多く出て来ましたが、森先生が良く説明して下さいましたので不満はありません。今後も宜しくお願い致します。

あまり規則をきびしくすると、年寄りの人たちが迷ってしまうのではないかが心配です

家の造りについて、皆が分かりたい事と話が合わなかった

例として、小泉らしい住宅とはどう考えたら良いか

自由記述からは、集団移転の際に実質的に資金を負担するはずの若い世代が参加しない・できないことを問題視する声や、年配の参加者から若い世代の参加を望む声が挙がっている。若い世代が参加しない・できないことで、年配の世代が情報伝達を余儀なくされ、情報伝達が十分ではないことによる不満もあった。参加しない・できない住民への適切なアウトリーチとフォローアップが重要である。

## (2) コミュニティの継承への認識

津波到達時の避難行動において、「他の人から声をかけられた」「他の人に声をかけた」「避難を伴にした人いる」などの問いに「はい」との回答がいずれも60%を上回っている。「他の人の避難の手助けをした」「他の人から避難の手助けをされた」という項目については比較的割合が低いものの、被災時の混乱のなかで、半数近い回答者が該当している（図28）。

津波到達時の避難場所については、中学

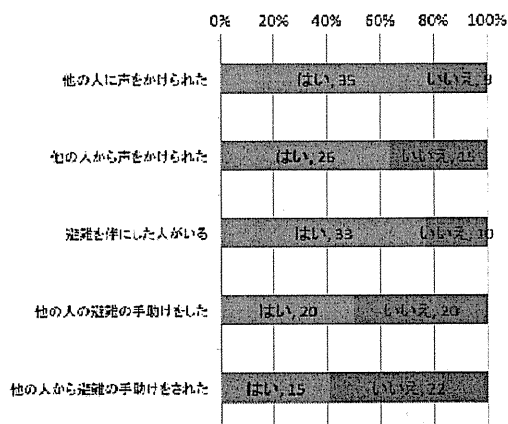


図28 津波到達時の行動について

校や小学校が多くみられ、そのほかにも近くの高台という回答も複数みられる。家族が別の場所で避難したケースや、避難場所を移動するケースもみられる（表8）。

各ワークショップにおける満足度をみると（図27）、全ての回で7割以上の住民が「満足」もしくは「やや満足」と回答しており、満足度の高さがうかがえる。中でも特に第4回、第15回、第17回において満足度が高い。例えば、第4回ワークショップでは「良い所を引き継ぐ」や「後世に伝える」という将来へ何を継承するかという内容を議論している。

小泉の人々の間にある相互扶助の考え方や人と人との繋がりを、移転後も引き継いでいきたいという意見が多数見られ、人それぞれを引き継ぐために、移転先でも被災前の宅地の集まりを大事にしようとしている。また、被災前から行っていたお祭りやイベントのために共有スペースを作ろうという意見も多数寄せられている。

ワークショップを進める中で、被災前の市街地は道路に対し短冊状の細長い敷地が宅地割され、宅地の道路の逆側に水路が入っており、水路側で隣の人と話しをしたり、野菜や洗濯物を洗ったり、隣に行くときは道路に出ずに水路側を通ることが可能だったことがわかった。道路、宅地、この共有空間という配列は、移転先の宅地計画のベースとなった。被災前にあった生活や空間をそれぞれの各世帯が引き継ぐだけでなく、住宅地全体として生活・空間関係を継承する計画が実現できたことが大きな成果である。

表8 津波到達時はどこへ避難したか（自由記述）※複数の回答は統一

小泉中学校
国道沿いの高台
気仙沼市内より消防団活動のため本吉へ向かい津波が来て浄福寺へ
小泉中体育館
お寺の山
高台にある小学校の駐車場にした
小泉中学校、それから友達の事務所
車中、高台
近くの山へ
津波が来るとは思わないので車移動中に
家の上の高い所に避難した
小泉中の上の畑
はまなすの丘
夫妻は自宅。長男と長男の妻は会社。孫は中学校。
小泉小に行ってその後に小泉中の上へ逃げた
小泉幼稚園→小学校→中学校
志津川通院中→大王寺P
会社(小泉地区以外)に居た為、避難等の行動は特になかった
最寄りの避難場所
地震発生後は、消防団活動(消防車に乗りマイクで住民の避難を呼びかけた)をしている最中に津波を目撃し、消防車でただちに小泉小学校に避難し、先に避難していた住民を小泉中学校へ誘導した。それからしばらく小泉中学校に避難していました。
自宅
勤務先の近隣小学校(気仙沼市内)
岩手県、山形県
自宅で津波にあった
本吉町小泉小学校
妻は息子と小学校へ、祖母も同じく。父は気仙沼市内から幼稚園の下の駐車場へ
常に家族で話し合っている高台にあるセブンイレブンに
仕事でいなかった
小泉中学校～又上の高台～はまなすの丘老人福祉施設
職場の旅行だったので、職場の人と職場のバスで海から遠ざかるように逃げた。その後、職場に一時避難し



---

た

---

職場にいて避難はしなかった

---

高台にある職場に避難してきた方の世話をしました。

津波到達時は職場（高台）にいました。

---

ワークショップによって住民は小泉の価値を再認識し共有する機会を得たわけであるが、その小泉地区における被災前の社会的繋がり、相互扶助とは一体どのようなものであったか、そしていかに共有したのか。

被災前の小泉地区では、住民同士の顔が見える日常的な意思疎通と相互扶助の関係が築かれていた。

ワークショップでも、小泉の良いところとして再認識したこととして近隣との付き合いが挙げられた。特に移転先の宅地の割り当て方法を検討する際、これまでの繋がりを踏まえて、今後どのようなコミュニティを形成するかといったことが丁寧に話し合われた。世代間の差があるものの、ワークショップを通じて、小泉地区の被災前の社会的繋がりや相互扶助が価値共有されたといえる。

しかしながら、被災前の住民間の繋がりや相互扶助について価値認識が共有された一方で、被災後、各住民の居住地が分散したという大きな環境変化と関係しながら、様々な状況やライフスタイルの変化も生じている。例えば、津波被害により自宅を失った住民の避難居住地の拡散に伴う、自治組織である振興会の休止が挙げられる。また、地区外への転出者が増加し、将来の少子高齢化がさらに加速することが懸念されている。このような変化を受け、住民間の

関係や集団移転へ向けた意識にも変化がみられる。

例えば、避難所から仮設住宅への移行に関して、その方法に納得のいかない住民がいたこと、また抽選による移行時期のずれが生じたため、避難所での生活が長く続く住民と早々に仮設住宅へ入居できた住民との間で、以前の関係が失われたとの声もある。

また、若い世代が好む近所付き合いと、高齢者の考える付き合いでは、その距離感が異なる。世代間で、当然だと感じる付き合いの内容にもギャップがあるという意見もある。同じ世帯内でも、移転先の宅地を決めるにあたり、互いに気遣い、あるいは決定権を委ねているが、誰の意見を優先させるかという問題は、世帯内での世代間意識の差が影響している。

これらを踏まえると、今後の小泉の地域的繋がりや相互扶助を検討する際、被災後の状況変化、ライフスタイルの変化を考慮する必要があり、世代間ギャップの解消が議論の要点であるといえる。

## 5. まとめ

被災直後の避難所での生活と比較して、被災後2年が経過した現在、生活に関わる様々な面において復旧が進み、小泉の住民

たちも徐々に回復しつつある状況にある。  
しかし、実際に移転先に移住できるのは更に2、3年後となる事実に対して、移転希望者からの焦りや不安の声が多い。

既に自宅を持ち始める住民と、まだ宅地すら決定していない住民による格差は、集団移転に対して積極的である回答者にとっても、焦りの要因となっている。

復興事業のスケジュールが諸事情により延期が繰り返される現状と、住民の回復への経過やプロセスにずれが生じている状況である。被災者が安心して集団移転に臨むためには、このギャップを解消する方策の検討が大きな課題である。

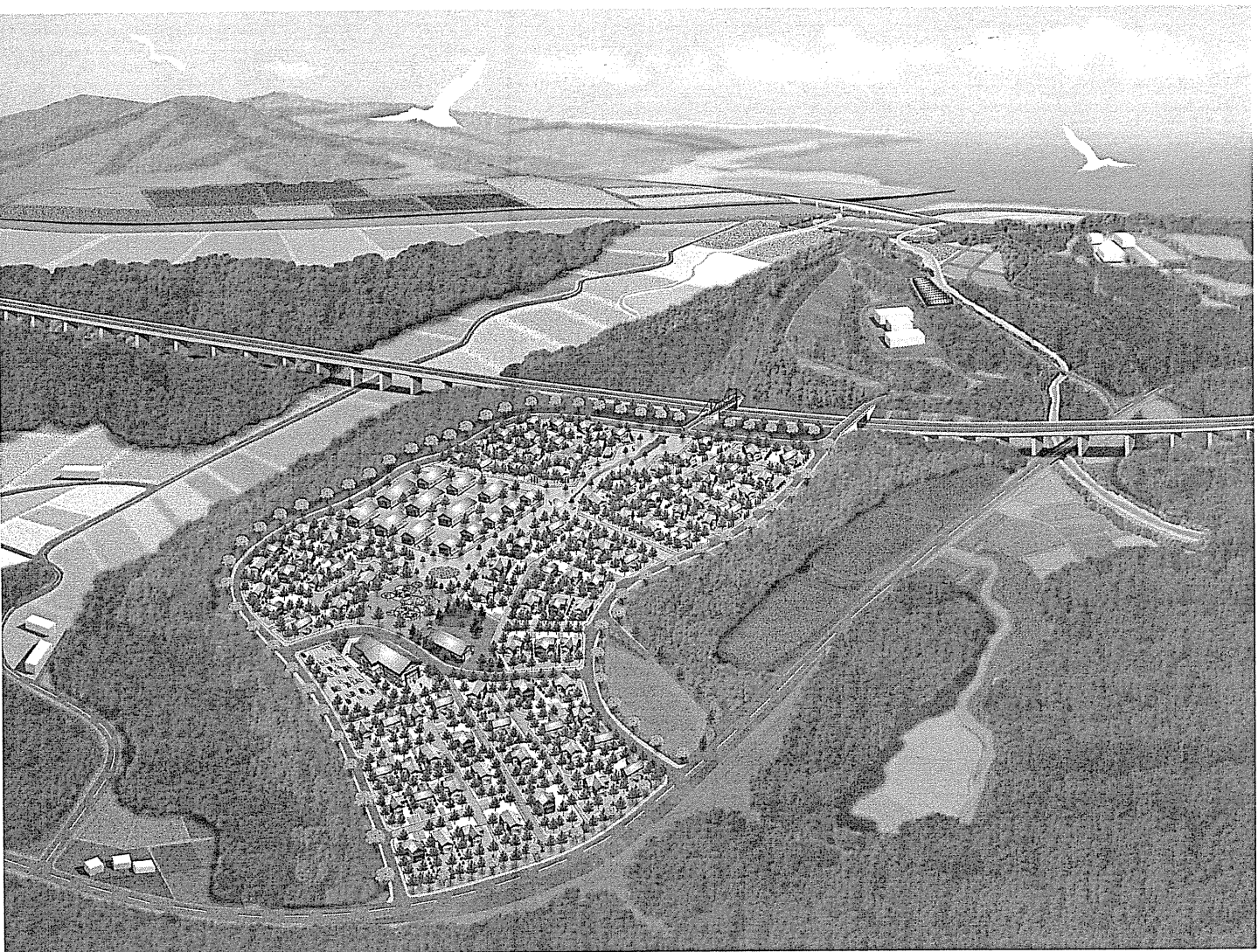
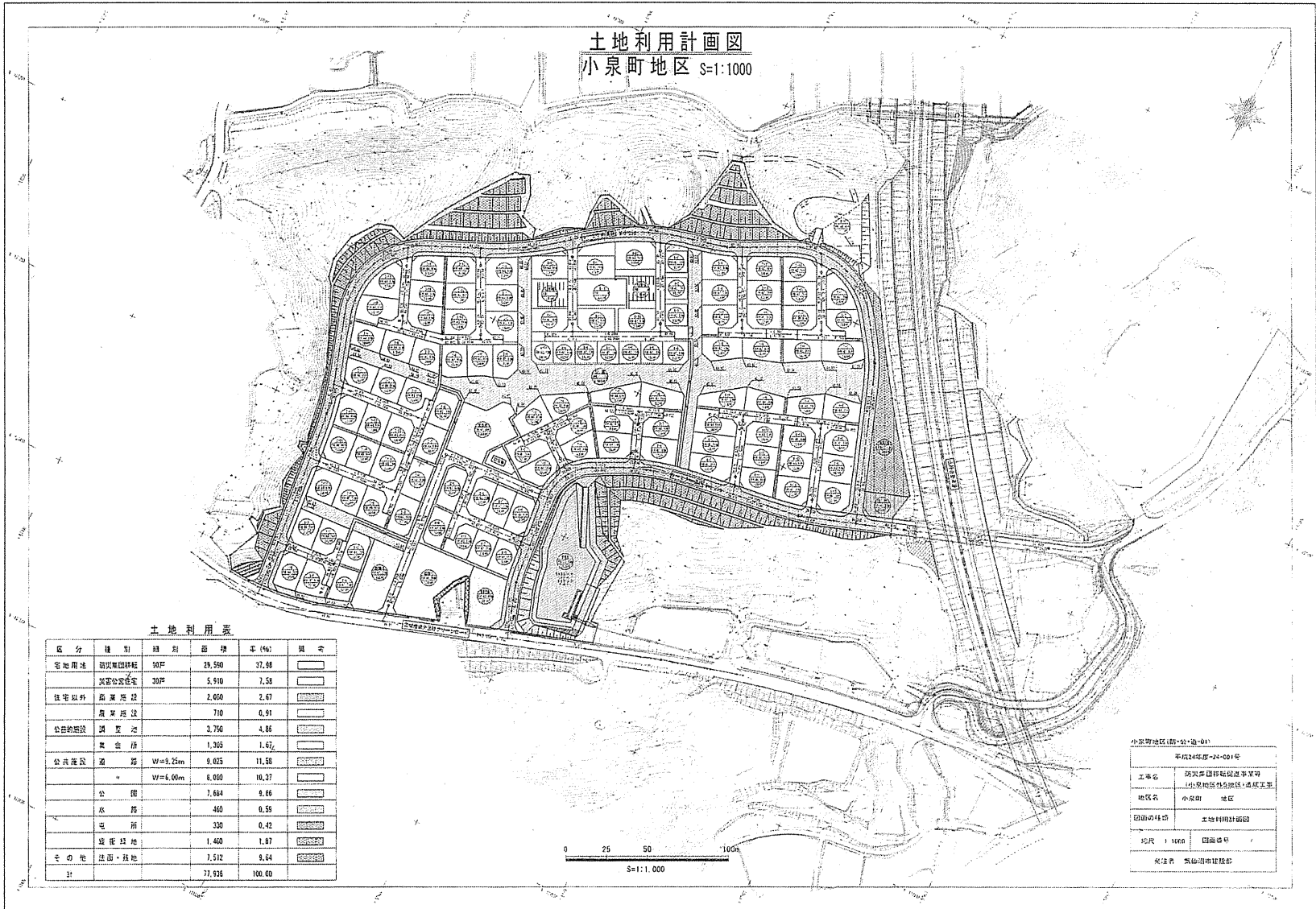


図 29 小泉地区の集団移転計画の鳥瞰図

土地利用計画図  
小泉町地区 S=1:1000



土地利用表

区分	種別	種別	面積	率(%)	図案
宅地用途	新築集団住宅	30戸	29,590	37.88	[Pattern]
	災害公営住宅	30戸	5,910	7.58	[Pattern]
住宅以外	商業施設		2,050	2.67	[Pattern]
	商業施設		710	0.91	[Pattern]
公共施設	調整池		2,750	4.86	[Pattern]
	集会所		1,205	1.62	[Pattern]
公共施設	道路	W=9.25m	9,025	11.58	[Pattern]
		W=6.00m	8,000	10.37	[Pattern]
	公園		7,684	9.86	[Pattern]
	水路		460	0.59	[Pattern]
	電所		330	0.42	[Pattern]
	遊技場		1,400	1.87	[Pattern]
その他	法面・雑地		7,512	9.64	[Pattern]
計			77,928	100.00	

小泉町地区(新・改・修)計画  
平成24年度~24~26年度  
工事名 防災集団移転促進事業等  
小泉町地区特色地区・造成工事  
地区名 小泉町 地区  
図面中核名 土地利用計画図  
図尺 1/1000 図面番号  
製作者 気仙道市建設部

図 30 小泉地区の造成工事に関わる実施設計・施工図

研究成果の刊行に関する一覧表

発表者名	論文題目	発表誌名	巻号	ページ	出版年
森傑	気仙沼小泉地区 住民発案 の集団移転	日本建築学会 2 周 年シンポジウム		68	2013

# 気仙沼小泉地区 住民発案の集団移転

小泉地区集団移転協議会  
北海道大学建築計画学研究室  
株式会社アトリエバンク

2011

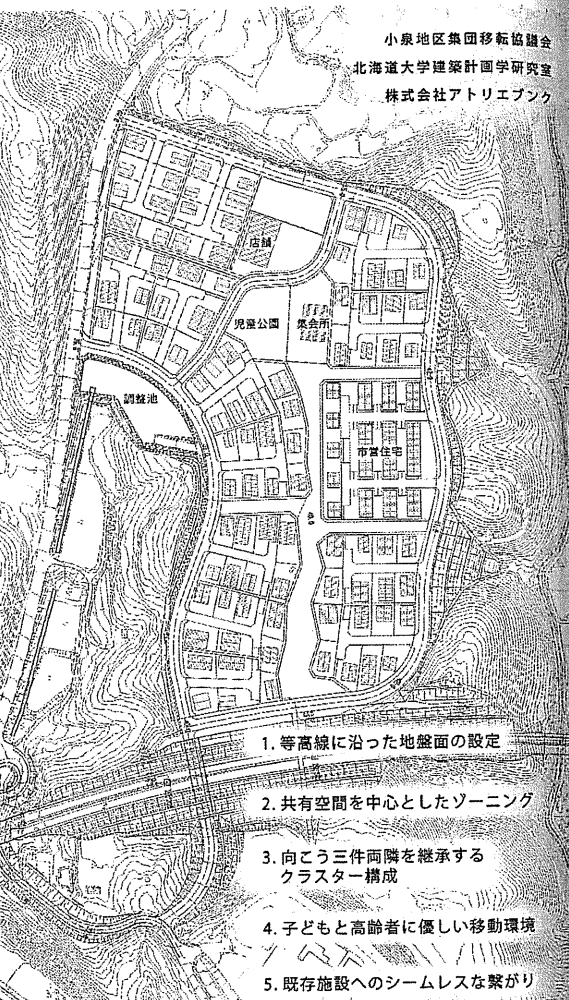
- 3/11 東日本大震災M9.0発生
- 4/24 集団移転設立準備委員会 発足
- 6/5 小泉地区集団移転協議会設立 承認
- 6/14 気仙沼市長に要望書提出
- 7/6 第1回小泉地区震災復興フォーラム
- 7/20 第1回WS「帰京すべき小泉のいいところ」
- 8/3 第2回WS「小泉地区がずっと元気ではいるには①」
- 8/16 第2回震災復興フォーラム「届けたいこの想い」下達し火を灯す集い」
- 8/30 第3回WS「小泉地区がずっと元気ではいるには②」
- 9/11 復興イベント「小泉地区、復活への感動！」
- 9/27 第4回WS「人～まち～自然」
- 10/11 第5回WS「人～まち～自然②」
- 10/26 第6回WS「人～まち～自然③」
- 11/7 第7回WS「人～まち～自然まとめ」
- 11/13 第3回震災復興フォーラム「五感で考える街の姿」
- 11/22 第8回WS「景観を考える」
- 11/28 第4回震災復興フォーラム「みんなで復興！みんなで再生！」
- 12/23 第9回WS「地域の絆①」

2012

- 1/17 第10回WS「地域の絆②」
- 2/3 第11回WS「魅力のある街づくり」
- 3/11 第5回震災復興フォーラム「道徳と感謝！」
- 3/14 第13回WS「後世に伝える」
- 3/28 第14回WS「景観碑を考える」
- 4/14 第6回震災復興フォーラム開催「ずっと小泉で暮らそう！」
- 4/22 福島県伊達市隣町地区視察研修
- 4/23 第15回WS「新しいまちづくり実践②」後世に伝える②」
- 5/21 第16回WS「新しいまちづくり実践③」
- 6/12 第17回WS「我が家のぬくもり①」
- 9/3 特別WS まちづくり2ndステージへ「Step and Go ことから踏み出そう！」
- 9/24 第18回WS「小泉の復興計画」
- 10/15 第19回WS「再生への近道」
- 11/12 第20回WS「再生への近道②」
- 12/10 第21回WS「再生への近道③」
- 12/25 WS年終まとめ報告会

2013

- 1/28 第22回WS「新しいまちづくり実践④」



1. 等高線に沿った地盤面の設定
2. 共有空間を中心としたゾーニング
3. 向こう三件両隣を継承するクラスター構成
4. 子どもと高齢者に優しい移動環境
5. 既存施設へのシームレスな繋が

明日を考える会よりごあいさつ 小泉地区 明日を考える会 HPより  
平成23年3月11日、午後2時46分、東日本大震災M9.0が発生  
未曾有の大津波に私たちの故郷、小泉地区も襲われ  
518世帯、1,810人の中、266世帯が流出・全壊、  
42世帯が半壊・浸水となり被害率は60%でした  
その後から厳しい寒さの中での避難生活、  
3月半の段階で600人以上の避難者が泊を寄せ合って生活していました  
おしんどい不安な気持ちを胸に押し込み、毎日の生活をしているなか、  
どうしたら復興への足がかりになるのか話し合っていました  
先のことは見えませんが、集まった地域住民それぞれが、  
それぞれの得意分野を活かし、1歩1歩前進することができています  
とりわけ地域の若い力の結集と、先輩方の英知と、  
全ての住民の小泉を愛する気持ちを  
新しいまちづくりに取り入れていきたいものです  
いま、私たちは地域住民一人ひとりが主体となり、  
復興のモデルケースとなれるような、新しいまちづくりを始めています  
このホームページにお越しくださいたいすべての皆様の応援・ご協力が  
私たち小泉地区住民の明日を生きる力になります  
「復興」から「再生」へ  
もう一度、新しく生きる小泉地区にどうぞお力をお貸しください

